

最後の食事

加藤 節子

おいでよ」

入院する前、夫とのやり取りは食べる「ことについて話すこと」が多かった。

もう30年も前の「ことだ。父はがんに侵され、自宅療養をしていた。医師の往診もなければ、看護師による訪問看護もない時代だ。毎日、寝室の壁に向かって寝て いるだけである。時々見舞いに行く私を見ると、小さくうなづくが言葉はない。ほとんど食べ物が喉を通りにくい状態だつた。

ある日、よほど気分が良かつたのか、父が力を振り絞つて「おいしいものが食べたいなあ」と言つた。
「何が食べたいん？」と聞く私に、「おいしいものがええなあ」と言つ。

ただそれだけで、あとの言葉はない。私は、父の欲しいものが分からなかつた。

あの時、父は何が食べたかったのだろうか。父に何を食べさせてあげたらよかつたのだろうか。何もしてあげられなかつたその時のことをして思い出すと、つらくなる。

そして、今春、私は心臓手術を受けた。7時間もかかると言われた手術、心のどきで大きさだが、(万が一、死ぬ)こともあるのかな……)と考えていた。

「元気になつたら、おいしいものが食べたいわ」

「おいしいものつて? 抽象的でよく分からんな。君がつくる家の食事が一番おいしいよ」
「それじゃあ、少しも楽しくないわ。私が元気になつたら、何を食べさせてくれるか、どうでどうしててくれるか、ちゃんとと考えて

入院して4日目、手術前日の夕食は丼いつぱいの白飯とおかずが数品。味付けは薄く、お世辞にもおいしいとは言えなかつた。特に、ご飯がぱさぱさだ。そうだ。私は、ご飯が好きだ。甘くて、粘りがあつてふくらとしたご飯が食べたいと切に思う。

最後に食べたいものと聞かれたら、「米のランク一位のお米で炊いたおにぎりが食べたい。梅干しを入れて、味付けのりが巻いてあつたら最高」。

あの時、なぜ父におにぎりを握らなかつたのか。病院の床で私は涙した。

作者	加藤節子
題名	最後の食事
原典	山陽新聞夕刊エッセー
原典の掲載日	2018.11